



題字 井口 文章
再刊 第510号
印刷・発行
錦城高等学校新聞委員会
編集室 2026

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：合唱祭直前！ 実行委員長が意気込む
陸上競技部 こだいら市民駅伝に出場
二面：62回生修学旅行特集2
1日目&5日目の体験の様子

美しいハーモニーを奏でて

合唱祭直前！ みんなで楽しもう



クラスで団結し真剣に練習に取り組む

明日2月17日(火)に合唱祭が行われる。3人の委員長が語った意気込みや、1学年書道美術クラス対象に行われた音楽科・新野先生の合唱レッスンの様子をお伝えする。

実行委員が語る合唱祭

いよいよ明日行われる合唱祭。中心となって活動してきた合唱祭実行委員長の小沢さん(2G)、山下寧々さん(2G)、小口純萌さん(2H)に聞く、2年生が修学旅行後学年閉鎖、その後も学級閉鎖のクラスが相次ぎ、準備が大変なことが多かったと口を

そろえる。そんな中でも、昨年度の合唱祭の改善点など春のアンケートで集まった声に即してできるように、1年生と連絡を取りながら動いていた。今年はいよいよ平等な審査をするために1学年の審査を音楽クラスと美術書道クラスで分けること、スムーズに進行するために先生投票で審査を行うこと、時間短縮のためにオーブニングセレモニーやクロージングセレモニーの内容やクラス座席の配置を工夫したことなどが改善点だという委員長たち。昨年度は行われなかった先生合唱について小口さんは「やるのかな？やるならお楽しみがあるよ！って感じですよ」と微笑む。

助け合って、最高の合唱祭へ

「合唱祭実行委員は縦のつながり横のつながりそれぞれ強い委員会だと思っています。本番でも1、2年生助け合いながら行っていきたいです」と意気込む小沢さん。山下さんはそれぞれの素晴らしい歌声を楽しみにしているそうで、「みんなの歌声が轟くような素晴らしい合唱祭にします！天歌奏してください！」と話す。

生徒に向けて、クラスで練習して、考えてきた時間は大切な思い出になると話し、「残りの時間、全力で練習に取り組みてください！最高の合唱祭を迎え、精一杯楽しみたい！」とエールを送った。

新野先生の特別レッスン

音楽科の新野先生による、1月26日から2月16日まで行われる書道美術クラスの合唱先生レッスンは、川越先生からの依頼だという。どうして自分たちだけでは分からないことがあると思いつく。だから、そのクラスの人たちにも教えてあげてほしいとお願ひされました。とのこと。

新野先生は合唱祭がとても楽しみだそうで「合唱祭の練習で錦城が音楽に染まるのがとても心地よいので今からワクワクしています」とほほ笑んだ。「音楽クラス以外のクラスがどのよう歌うのかも、とても楽しみです。合唱は団結力とかチームワークが大切だと思っていますので、頑張ってください」と錦城生にエールを送ってくれた。

新野先生の指導を受けた書道クラスの鈴木美雨さん(1F)は、「楽譜の知識などがなくて分からないことを的確に教えてくれて、とても有意義な時間でした」と満腹。合唱が大好きな木船太さん(1F)は「ひどかったらどう自分たちを褒めてくれ、とても優しく丁寧に教えてくれてとても嬉しかったです」と大満足な様子だった。

合唱祭は、この学年で行う最後の学校行事だ。クラスで団結し、歌い切ろう。

放送部 特別企画実施！

「先生ラジオ」で昼休みを盛り上げる



次の企画でお会いしましょう！

2年生が修学旅行中に昼の放送で行われた、放送部の「先生ラジオ」。番組は、1月26日(月)、28日(水)、30日(金)の計3回放送された。1年部員が主となって、企画から収録まで行った。月曜日は青田先生、水曜日は桐ヶ谷先生、金曜日は小向先生がゲストとして登場し、「高校時代に所属していた部活」や「バレンタインのエピソード」、「錦城の先生とのエピソード」などのトークで番組を盛り上げた。番組の最後には、先生のおすすめの曲が流された。実際にその放送を聞いた生徒は、「知らなかった先生方の一面や過去を知ることができ、すごく楽しいお昼休みになりました！」と興奮気味に話した。

収録した音声を時間内に収めるのが大変だったという部員の山田歩武さん(1F)は、「先輩方がいない中、初めての挑戦で、不安要素も大きかったです」と振り返る。「先生と楽しく」をテーマに企画を進め、先輩方に恥じないような完成度を目指したそうだ。タイミングがあれば企画放送を続けていきたいという山田さん。「今後の放送部の動向に注目してください！」と笑顔でこれからを語った。(綿)

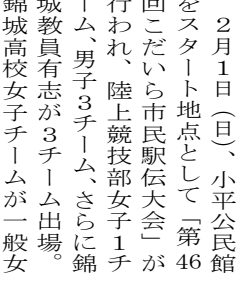
今年初めての雪が降りました！

2月7日(土)から8日(日)にかけて、今年初めての雪が降りました！久しぶりの積雪に錦城生は大はしゃぎ。



陸上競技部 こだいら市民駅伝で女子優勝

「ベストを出せてよかった」



タスキを託し、教員チームも爆走！



選手に多くの声援が送られる

2月1日(日)、小平公民館をスタート地点として「第46回こだいら市民駅伝大会」が行われ、陸上競技部女子1チーム、男子3チーム、さらに錦城教員有志が3チーム出場。錦城高校女子チームが一般女子の部で優勝、陸上競技部男子の部で優勝、陸上競技部男子の部で3位を獲得した。大会後、男子区間賞をとった選手と、優勝した女子チームに話を聞いた。男子の2区

区間賞を獲得した増田一秀さん(2J)は地元の大大会でいつも以上に楽しかったそうだが「今大会は男子3連覇がかかっていたので悔しいです」と走った大川澄和さん(1J)は「前の3人のおかげで何とか走り切ることができました。より速く走れるよう頑張りたいです」と微笑んだ。教員有志チームで出場した榎本先生はレース後、「昨年より21秒縮めることができて、嬉しかったです」と満面の笑み。小高先生は「応援してくれる人がいて嬉しかった」と話した。(梅)

女子の1区を走った菊池理沙さん(2G)は、修学旅行で一週間くらい走れず心配だったけれど、去年より15秒速く走れた」と話した。

むらさき草

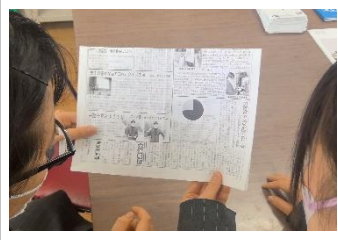


手話を実際にやるのは久しぶり。もっと使う機会があればもっと覚えられと思います。

1959年、バディ・ホリーら3人のアメリカのミュージシャンが飛行機事故で亡くなる。1969年にはブライアン・ジョーンズ、1970年にジミ・ヘンドリックス、ジャニス・ジョプリン、1971年にジム・モリソン。伝説的なロックスターたちが偶然にも27歳で亡くなる。そんな悲劇を歌った8分36秒の長尺にもかかわらず、1972年1月に4週間全米チャート1位、同年の年間ビルボードチャート3位という結果を収めた名曲がある。1971年にリリースされたドン・マクリーンの「アメリカン・パイ」。60年代のロックの革命を感じていたドンが書いた曲だ。▼歌詞中では飛行機事故などを連想させるフレーズなどが多々あり、サビではバディ・ホリーの「That'll Be the Day」という曲をオマージュし「This'll be the day that I die」(今日が俺の死ぬ日だ)と歌っている▼亡くなった人や時代を懐かしんで生まれた名曲は多いだろう。ジョン・レノンが亡くなったとき3人のビートルたちは彼を弔い、曲を作った。ボブ・ディランなど多くのミュージシャン達もジョンの死を悲しみ、曲を書いた▼そうやって生まれた数々の名曲たちは人々の心に悲しみを刻み、今もなお輝き続けている。私がよく聴く曲にも沢山思い当たるものがある▼ロックには自由で、反逆的で情熱的なイメージがあるだろう。だが、私にとっては時にロックは鎮魂曲だ。失われていった者たちや過ぎ去りし日々を悼み、懐かしむ気持ちを伝えるメッセージに聴こえる▼「ロックンロール魂」なんて言葉があるが、その魂というのは先立っていったロックの英雄たちを哀しみ語り継ぐとする残された者たちの覚悟のことなのだろう。そんなロックが私は大好きだ。(菊)

衆議院選挙終了

新聞委員1年生から見たリアルな感想



前回記事を見て話す編集部長

2月8日(日)に行われた衆議院議員総選挙。受験期間のため3年生全体アンケートを取る事ができなかったが、選挙後に編集部1年生で話し合ってみた。実際の選挙を見て、編集部からは「雰囲気を楽しみたいから行きたくなった」という声が上がった。ただし、前回509号の直前アンケート記事を見て話す編集部長

ケートでは「受験と重なる時間を取れない」という意見もあった。編集部員からも地元の期日前の投票所は遠いし、当日は受験があったら自分に行かないかもという声が上がった。社会科の石井智先生は、アンケート結果から「衆院選に関心がある」錦城生が多いこ

とは好ましいのではないかと振り返ってくれた。生徒へ向けて、新聞などを見比べ記事と比較検討し、自分自身の意見を作してほしいと語る。ある編集部1年生は、「一票を投じる時は、生活や社会をより良くするためにしっかり考えたいです」と語る。投票率は終わってしまったが、今後の選挙や政治の行方について、自分なりに考えていこう。(藤)

インフルエンザに注意しよう



学年・学級閉鎖が起こるなど、インフルエンザが流行している。手洗い・うがい・換気をしっかりとて体調を整え、ウイルスに打ち勝とう！

【509号の訂正とお詫び】

509号に掲載した内容に誤りがありましたので、訂正し、お詫び申し上げます。
【表】スキー記事 正：串田昌也先生
正：修了式
正：神田陸翔さん(2G)
【裏】トイレ掲示 正：水田みゆき先生

観光&体験学習 修旅お届け第二弾

前号に続いて、今回は 62 回生修学旅行のスキー以外の部分の様子をお伝えする。一日目に行われた仙台観光と五日目に行われた体験学習では、どちらもクラスごとに貴重な経験をする事ができた。日常生活から飛び出してさまざまなものを体験した生徒の声をお届けする。(編集部共同取材)

水族館・いちご狩り

B・C・D・F・G・H・K・L 組は、仙台うみの杜水族館と山元いちご農園に訪れた。仙台うみの杜水族館では、様々な生き物たちの趣向を凝らした展示を楽しんだ。三陸の海を表現した巨大な水槽は、背丈の倍以上の高さがあり、自由に泳ぎ回るとくさんの魚たちに圧倒された。また、ちょうど節分にちなんだ特別展示も行われていた。恵方巻の形をした筒が水槽内に設置されていて、その恵方巻からあなごが顔を出すというユニークな姿が見られた。

屋外のスタジアムでは水族館の生き物たちのショーを見ることができた。最初に出てきた鳥は素早く客席を飛び回り、観客の頭すれすれを通っていく。次のアシカはトレーナーと息の合った芸を魅せ、客席からは「かわいい～」という声があがった。ラストを飾るイルカは何度もダイナミックなジャンプを披露し、大きな水しぶきがあがった。

山元いちご農園では、各自好きにいちごを摘んでその場で食べた。いちごの品種は2種類あり、ほどよい酸味があり爽やかな「もういっこ」と甘くて果肉がしっかりしている「とちおとめ」、どちらも甲乙つけがたい美味しさだった。売店でいちごのパフェを食べたりジャムをお土産に買っていたりする生徒もいて、東北の美味しいいちごを満喫していた。

山元いちご農園では、各自好きにいちごを摘んでその場で食べた。いちごの品種は2種類あり、ほどよい酸味があり爽やかな「もういっこ」と甘くて果肉がしっかりしている「とちおとめ」、どちらも甲乙つけがたい美味しさだった。売店でいちごのパフェを食べたりジャムをお土産に買っていたりする生徒もいて、東北の美味しいいちごを満喫していた。

松島

A・I・J・M組は松島観光をした。快晴の下、全員で乗った遊覧船では松島の絶景を堪能。冷たい風が吹きさす遊覧船のデッキで笑顔で美しい島々を眺め、写真に残す生徒が多くいた。



青い海を背景に記念写真

けたそうで、「ただ楽しいだけではなく、災害を身近に感じる事ができていい体験になりました」と話してくれた。また、瑞巖寺五大堂も訪れたそうで、透橋という格子状の床板から海面が見えるスリリングな橋も印象に残っているそうだ。「全体を通して、非日常を味わえました。とても楽しかったです」と笑顔で振り返った。

笹かま焼き体験・いちご狩り

E 組は、笹かま焼きの体験をした。棒にさした状態の笹かまを網で焼き、自分の好きな焼き加減で食べることができた。ある生徒によると、笹かまの片面を焼いている際にクラスの間で「もう焼けたかな?」とやって焼き色がつく前にひっくり返し「まだだったあ」という会話が飛び交っていたことが印象的だったそうだ。焼いた笹かまは温かくふくらとしていてとてもおいしかったと笑顔を見せた。笹かま焼き体験が終わった後に向かった



みんなで笹かまを焼く

のは笹かま焼き体験をした鐘崎笹かま館に併設されている七夕ミュージアム。歴代の仙台七夕祭りで使われていた笹飾りがたくさん吊るされており、折り紙で作られた鶴が枝垂れ桜や藤のようにつながって幻想的であったそうだ。ある生徒は七夕の飾りを見て「伊達政宗公のいた時代から今にかけてほとんどきれいに保管されているのは土地に住む人々とその歴史の積み重なるの結晶であると感じました。機会があれば仙台七夕祭りが行われる時期に行ってみたいです」と話している。

午後には JR フルーツパーク仙台あらはまに向かい、生徒たちはイチゴ狩りを楽しんだ。夕食の直前であったためイチゴの食べ過ぎで苦しんだ生徒も多かったそうだ。



色鮮やかな笹飾りの展示

松島グルメ



牛タンコロッケ
寒い日にぴったりの一品。肉汁たっぷりて柔らかいテクスチャの牛タンが味噌のたれとマッチ!とにかくおいしい。

ずんだシェイク

想像より枝豆の風味がしっかりしていた。濃厚でクリーミー。甘すぎず、素材の良さがふんだんに活かされた仙台名物。多くの錦城生が買ったそう。



味噌作り体験

C・E・J組は仙台駅付近のホール、「山形テルサ」で味噌作りを行った。作ったのは、国産の大豆や麹をふんだんに使った贅沢な味噌だ。参加した生徒たちは大豆を足で粒がなくなるくらいまで踏み、塩や麹を入れてさらに混ぜたそう。参加したある生徒は「料理というより土木作業みたいな感じだった」と感想を話す。作った味噌は各家庭に配達され、現在各家庭で発酵の段階にあるそうで、味噌を食べられるのは今年の夏ごろだそう。「発酵が終わって食べるのが楽しみです。味噌汁に使うと思います」と生徒は楽しそうに話した。



↑生徒の作った和菓子
見て楽しい!
食べて美味しい!

和菓子作り体験

B・G組は乃し梅本舗佐藤屋さんの指導で、蔵王体育館で行われた和菓子作り体験に参加した。こしあんを様々な色の餡で包み、専用の道具を使いながら、形を作っていくという体験を行った。繊細な餡を乾いてしまいう前に造形するのがとても大変だったそうだ。有名な菊の練り菓子を作る工程の体験や、各自でおもしろい形の和菓子を作る体験を楽しんだ。自分で作った和菓子は各自持ち帰り、美味しく食べたそう。



アドバイスをもらいながら製作

「陶芸体験が初めてだったので、ろくろを実際に触れて嬉しかったです」と話す生徒もいた。陶芸をテーマにしたドラマを見て興味を持っていたと言い、今回の体験を楽しみにしていたそう。体験で作った焼き物は、工房の方が焼き上げて色をつけてから学校に届く。生徒たちは完成品を想像しながら色を選び、笑顔で互いの作品を見合っていた。個性あふれる焼き物たちが学校に届く日を楽しみに待たばかりだ。

お鷹ぼっぼ絵付け体験

A組はお鷹ぼっぼの絵付け体験を行った。お鷹ぼっぼは山形の伝統工芸品で、一刀の刃物のみで切り出された木を彫って作る。

生徒が絵付けをしたお鷹ぼっぼ。オリジナリティあふれる作品がたくさん見られた。



彫り駒体験

L組は「将棋むら天童タワ」にて彫り駒体験を行った。大きな将棋駒が載った建物の外観に、生徒たちの驚きの声が上がった。中に入り、彫師の方から説明を受けて、いざ作業開始。ところがこれがスキーに負けず



慎重に文字を彫り進める

体験後生徒たちは各自買ったおみやげやおやつを楽しまし、花笠音頭で見送られてタワい後にした。

とも劣らない難関だった。優しく丁寧に彫ろうとすれば跡もつかず、かと言って力を入れればあらぬ方向に彫刻刀を運んでしまう。それでも助言をもとに少しずつコツを掴んでいき、自身の彫った跡を確かに残した。仕上げを彫師さんに任せ、今は完成品の到着を心待ちにしている。

5日目 伝統文化を体験

編集後記

修学旅行を振り返ってみるとあっという間だった。楽しい時間ほど早く経つというが、まさにそうだった。

初日の観光では、クラスメイトたちといつも過ごしている教室から離れた、非日常の地で思い出を作ることができた。スキー実習では、雪山の中で仲間と支えあって絆を深めながら、スキーの技術だけでなく、諦めず挑戦することの大切さも学べた。最終日の体験学習では、東北の伝統文化を実際に体験することで、その魅力をより深く知ることができた。進級までの時間も残り少なくなってきたが、修学旅行で得た経験や思い出を胸に、残りの約一か月を充実したものになりたい。来年、修学旅行に行く 63 回生も、前回と今回の記事を読んで修学旅行を楽しみにしてくれたら嬉しい。



↑仙台名物
ひょうたん揚げ